

現場レポート① 地域おこし協力隊

田舎暮らしの魅力を発信！

地域おこし協力隊の制度がスタートしたのは、平成二十一年、まだ十年も経っていない。

「人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に受け入れ、地域協力活動を行ってもらい、その定住・定着を図ることで、意欲ある都市住民のニーズに

（参考）。

「わが国は、人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に受け入れ、地域協力活動を行ってもらい、その定住・定着を図ることで、意欲ある都市住民のニーズに

が平成二十九年度には四八三〇名まで増えている。

募集は地方自治体が行い、「地域協力活動」に従事してもらう。総務省の管轄で、隊員一人につき報償費等（上限二百万円）と活動費（上限二百万円）が、自治体に対して特別交付税として支給される。過疎で歳入減に悩む自治体にとっては、人件費も活動費も国が負担してくれるというありがたい制度だ。募集に係る経費についても、地方自治体一団体あたり二百万円を上限に支給される。

隊員の給与は地方自治体によって異なるが、国から支給される年間二百万円がベースとなっている。県北エリアでは現在、安芸高田市が四名、三次市が十一名、庄原市が四名、地域おこし協力隊員として仕事に従事している。

具体的な活動例を一つ、紹介しよう。安芸高田市役所の企画振興部地方創生推進課に配属されている田中賢さん（25歳）が、安芸高田市の地域おこし協力隊員に採用されたのは一昨年の四月。田中さんが安芸高田市を選んだのには理由があった。

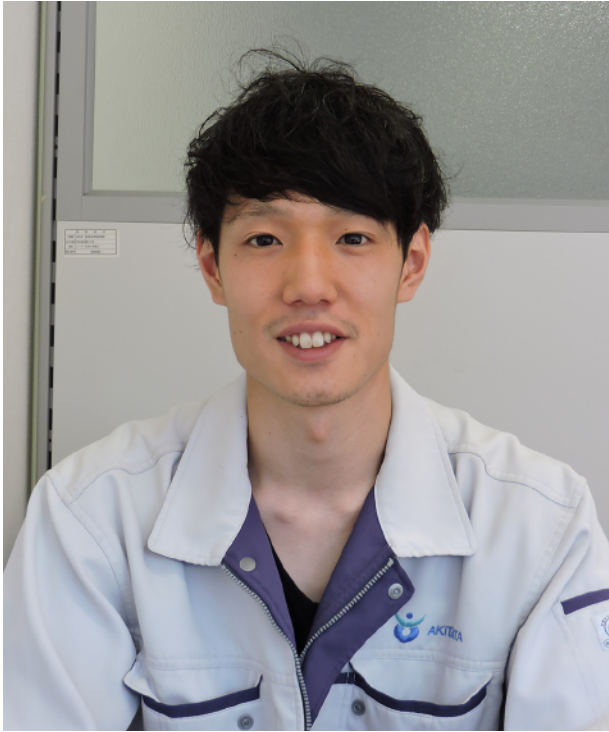
広島市立大学（広島市安佐

南区）で彫刻を四年間専攻した田中さんは、卒業後も創作活動ができる場所を探していた。広島市内で工房（アトリエ）を借りるには家賃が高すぎる。声をかけてくれたのが、大学の先輩の彫刻家、山中洋明さん。安芸高田市の向原で、自分の工房を構えている。空き家を一件借りて、鍛金・彫金室、加工部屋、溶接室と、用途に応じて部屋を使い分けているという贅沢な間取りだ。

何度か遊びに行っているうちに、その土地がすっかり気に入ってしまった。環境も人柄もいい。ここでなら、思う存分、創作活動ができそうだ。広島市内へのアクセスも便利。移転で空き家になっていた工場を借りて工房にした。そして、就職先を探しているときに、親しくなった地元の人から声をかけてくれた。

「市が募集している地域おこし協力隊に応募してみたら」かくして、田中賢隊員が誕生した。

そして、田中さんの体験から生まれた企画が「広島芸術家工房探訪」、安芸高田市内の作家の工房を巡る二日間のツアーで、今年の三月に開催された。自分や先輩の山中さん



田中賢隊員（安芸高田市役所にて撮影）

と同じように、安芸高田市で創作活動をする作家が増えてくれれば……。

彫刻家の山中さん、陶芸家の佐々木りつ子さん、画家の筒井直美さん、金工作家の原田武さん、現代美術家の田川幸義さん、田中さん自身が市内の五人の作家に声をかけて、企画は実現した。ツアーの参加者は一人だけと残念な結果に終わったが、芸術家のアトリエが集まるエリアだという情報は、安芸高田市のホームページから世界に向けて発信されている。

地域おこし協力隊の契約は一年毎の更新で、原則として最長三年、田中さんはあと十カ月の任期。退職したあとは、デザイン事務所を開く予定だという。市のホームページで紹介されている「広島芸術家工房探訪」のチラシも、田中さんが自分で制作した。

地域おこし協力隊員が退職後に地元で起業した場合、百万円を上限に国から助成金が支給されることになっている。田中さんはデザイン事務所を経営しながら、安芸高田市で彫刻の創作活動を継続するという将来設計を描いている。

地域おこし協力隊の成功例では、岡山県美作市が有名だ。人口減、少子高齢化、耕作放棄地と化した棚田、間伐もままならない里山、絵にかいたような過疎地で、限界集落とも呼ばれるようになった地区が、地域おこし協力隊を起爆剤に、住民と一緒に20ヘクタールの棚田を見事、再生させたのだ。

しかし、こうした成功例ばかりではないようだ。応募者の希望と仕事内容が合致せず早期退職したケースや、退職後の就職や起業がうまくいかず、地元を離れるケースも増えていると聞く。土地との相性もあるだろう。田中さんのように、応募する地域の情報を知っておくのも一つの方法だ。土地に愛着が生まれれば、仕事にも熱が入る。募集している自治体がどんな活動を求めているのかも、ある程度リサーチしておく必要があるだろう。

「地域力創造プラン」の柱として誕生した制度だ。システムも人も、しっかりと根付いてくれることを、過疎地の住人の一人として、切に願っている。

新・図書館員ノート「思い出の一冊」③

「おおきなおおきなおいも」

家にあつた子ども用の本は、ほぼ姉のもの。先に生まれているので当然ではあるが、私が自分で本を読むのが得意ではなかったのも理由にある。

そんな本の中に『おおきなおおきなおいも』（赤羽末吉さく・え／福音館書店刊）がある。今ではスイスイ読めるが、読みきかせてもらって楽しんだ本だ。おおきなおいもは、食いしん坊の私にぴったり。そして、子どもたちに人気で、昨年ヒットした「うんこ漢字ドリル」や「おしりたんでいシリーズ」など、「うんこ」や「おしり」と



共に子どもが大好きなキーワード「おなら」も出る。子どもたちの空想がまった絵童話で、さつまいも色と黒の二色刷りがすてきな一冊だ。

子どもの頃にはまっていた遊びを思い出した。ラジカセで録音して、音のバリエーションを姉と競い合う遊び。お題は「どっちがおもしろいおならの音をひねり出せるか」である。※安心して下さい。本物の…ではありません（笑）。腕に口をあてて「ブーッ」と音を出したり、「プリプリ」と言ってみたり。自分の声が他人の声のように聞こえて、カセットを再生したときのおもしろさといったら。

あの赤いラジカセも、何度も上書き録音したカセットテープも捨ててしまったが、そんなノスタルジアをおぼえる唯一の本は、ずっと家の本棚で私の人生を見守っている。勝手に、ちよっぴりはずかしい子どもたちの遊びと結び付けられて。

（三次市立図書館員によるリレーエッセイ、執筆者の似顔絵は有光館長作）



司馬遼太郎『翔(と)ぶが如く』

——明治維新は「革命」だったのか

前回5月号で『西郷と大久保』を取り上げましたが、ほぼ同じ構図で、西郷隆盛と大久保利通を描いているのが大長編小説『翔(と)ぶが如く』(文藝春秋、全7巻)です。ただ、こちらは明治新政府樹立の過程で、征韓論を巡って2人が対立し、日本の進路を大きく分けたところに重点が置かれています。それと同時に、明治維新は「革命」だったのかどうかを問うています。

江戸幕府の中核である江戸城を無血開城したことで、「市民革命だった」ととらえる人と、反対勢力と戊辰戦争を交えており「暴力革命だ」と言う人、いや幕藩体制から天皇制に変わっただけで、民衆が解放されたわけではなく「政変(クーデター)」だったとする人の、大きく3つの流れがあるようです。

明治政府といっても、薩摩と長州の藩兵を東京に集め、薩長土肥の代表が、次々と布告を出していくスタイルでした。王政復古の後、藩籍奉還させ、さらに藩を廃して府県体制にしたところに、明治5(1872)

大きく分けると、藩を失った士族の不满・処遇を背景に外に目を向ける征韓論者と、外国を巡って列強との落差を知り、内治を叫ぶ反征韓論者に分かれました。新政府の要(かねめ)の西郷がこの論争に敗れ、新政府を見切って郷里の鹿児島に帰った

江藤新平、大隈重信、伊藤博文、山県有朋、桐野利秋などが、豊富なエピソードにまぶされて登場します。その密度から言えば、小説というより、研究書のような重厚さです。西南戦争で西郷が果てるまでの5年間がめまぐるしく展開します。

たことで、国論は2分されたのです。本小説は、『西郷と大久保』と同じ史実に立ちながら、2人の対立を通じて、「明治維新」の姿を深く問うています。西郷と大久保の周りに立ち現れる明治の要人たち、木戸孝允、三条実美、板垣退助を始め、岩倉具視、

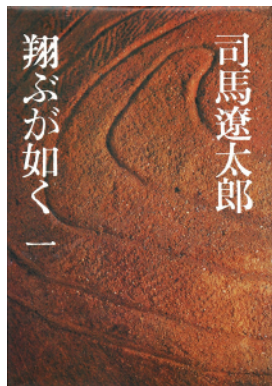
ここから窺えることは、幕藩体制はポロポロになっていたことと、列強との落差が大きかったとはいえ、これを埋める急激な変革に世の中が追いつかなかったことです。

「革命」については、従来の学術的な定義では、権力が新しい階級に移ることが求められていました。だから、明治は、下級士族による「政変」とされました。しかし、新政府は農民出身者も処遇され、国民徴兵制が出現し、「国民国家」の形態を備えてきており、司馬遼太郎は「革命だった」と、実感として主張しているように思います。

また読んでみたい本②7

青年たちに

音谷 健郎



【翔ぶが如く 表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思います。毎月1冊ずつ紹介しています。

第27回は、司馬遼太郎の『翔ぶが如く』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

小説では、さらに「新国家建設」が抱える課題を、次々と繰り出し、どう帰結するかにも注意が払われています。新国家建設は少ない人材では手に負えないのではと思えます。しかも大久保、板垣の暗殺、江藤の処刑、西郷の自決……と、暴力的に思想が断ち切られていく現場も見せつけられます。偶然の成り行きも多く、「新政府」は、もっと違った形もあつたのではと思わされます。小説のおもしろさです。

次回は柳田国男の『遠野(とおの)物語』です。

「比和一日一話―余滴・後編」

みのりの秋

比和の夏は短い。盆を過ぎると川遊びをする子どもも、魚とりを楽しむ人の姿も川から消え、秋の七草も花盛りを迎え、秋の気配が日増しに濃くなってくる。秋の七草のうち、

しみであったが、今ではすっかり見捨てられてしまい、口にする子どももない。枝もたわわに熟れた柿でさえ、子どもたちは見向きもしなくなつた時世だから、山の幸を口にしないのは当然のなりゆきなのであるうか。

オミナエシ、キキョウは盆花として欠かせられない供花で、それにワレモコウとヒゴタイも加わる。ヒゴタイは分布の中心が朝鮮半島・中国大陸東北部（旧満州）にあり、そこから中国地方へ分布を拡大した植物で、比和、高野、西城、帝釈のごく一部に自生するルリ色をした美しい花である。比和での自生は越原、福田、元常の限られたところに見られ、そこでは盆の供花として大切にされている。

アケビ、マツブサ（方言名まつぐいび）、ヤマブドウ、ヤマボウシ（方言名おつき）の実どりは子どもの楽

吉良龍夫博士は暖かさの指数からいえば、八五度を下らず暖帯に属し、寒さの指数から言えば、マイナス十度より厳しく、照葉樹林が成立しない地域が存在するとして、これを「クリ帯」として独立させている。比和の山々の中腹は吉良博士のいう「クリ帯」を想わせるクリの優占する樹林が発達する。この栗材は鉄道の枕木として多く刈り出されたが、まだ多く残り、栗拾いを楽しませてくれる。栗は乾燥させて皮を取り、「かちぐり」として保存していた。江戸時代には救荒植物としてツノハシバミ（方言名うしなつぐり）、どんぐりの

著者紹介…一九三一年、比婆郡（現・庄原市）比和町に生まれる。農学博士（九州大学）。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びと」（シンセイアート出版）から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

他、トチノキの実も採取して蓄え、実をついて粉とし、水にさらしてアクを抜き澱粉をとり、食料の不足を補った。澱粉というクズ、ワラビ、ウバユリ（方言名やや）の根を掘り、澱粉を精製していた。特にウバユリは多く利用され、ウバユリから採った澱粉を「かたくり粉」と呼び、出産祝や病氣見舞のとき用いていた。

キノコは比和から一七〇種以上の種類が記録されていて、七十種以上は食べられ、有毒のものはごく限られている。シメジ（方言名おほぎ）、ネズミタケ（方言名ねずみで）、コウタケなどごく一部を食用とし、採取して塩蔵し、冬に備える。他の地方では例のない毒菌のツキヨタケ（方言名くまびら）を塩蔵し、冬に備える風習が残っている。

ブナの四季

ブナは五月、新芽を開き、やがて

嫩黄（浅黄色）の若葉をつけ、夏は濃緑の葉を茂らせ、秋は美しく黄葉し、やがて冬の到来と共に落葉し、白い幹肌を冬の日射しの中で輝かす。ブナは四季を通じて、その麗姿を楽しませてくれる。ブナ林、またの名は夏緑広葉樹林、それは温帯を代表する植生として、地域に豊かな緑と清冽な水をもたらせてくれる。

中国山地は古くから開発の手が加わり、時に砂鉄の産地として開発が進められてきた。砂鉄の採取に当っては森林を伐り開いて風化した花崗岩類の風化土（まさ土）を露出させ、それを水の流れて押し崩し、その土石流を麓に設けた洗い池へ導き、砂鉄と砂をその比重の差によって分離し、砂鉄を採取していた。そのため、山腹を広く覆っていたブナ林は失われていった。さらに採取した砂鉄は木炭を使って熔融され、玉鋼に精錬されていくが、その工程「たたら

吹き」にはきわめて大量の木炭が使用された。一回の操業で十五トンの砂鉄を熔かし、玉鋼を作り出すのに砂鉄と同じ目方の十五トンの木炭を使用するという（靖国鑑の例）。一回の操業は七二時間であるから、秋の彼岸から春の彼岸まで、仮にフル操業したとすると、操業回数は二十回以上に及び、使用した木炭の量はおびただしい量となる。そのため、



寿山五朗「山麓の秋」(1991年水彩画)
夫婦展記念「寿山五朗・ツユ子画集」より転載

失われた森林は莫大なものであったことは容易に推測することができよう。砂鉄採取の遺構は吾妻山の池原いけのはらに見られる三つの池と吾妻山西斜面の鉄穴残丘に残され、往時の盛況をしのぶことができる。たたら時代のブナ林の受難の時代でもあった。

ブナ林の第二の受難の時代は、太平洋戦争後、有用針葉樹の増産計画がもくろみられ、わずかに残ったブナ林は皆伐されてチップ材と化し、そのあとに人工林の造成が進められた。さらに、保養・観光地として乱開発されている現代である。かつて、吾妻山の山腹を広く覆っていたブナの原生林も昭和三十年代の前半、そのほとんどが失われ、今は南原、池原のごく一部にわずか残っているものの、観光開発の流れの中で衰亡の一途をたどっている。

ブナは比和の豊かな緑を象徴する樹木として、町制五十年を記念して町木に選定された。四季を通じてその美しい姿は人々の心に大きな安らぎを与えるばかりでなく、ブナ林は比和川の清冽な水を生み出す源となっている。この豊かな緑こそ、子孫への最大の贈物であろう。

老いの雑記帳④

「ボケやすい人」

私が属している会の会報紙に「ボケやすい人の性格」というコラムが掲載されていた。そのまま転記すると、

- ① 他人の言い分を聞かず、自己中心にしか物事を考えられないガンコな人。
- ② すぐ、腹を立て、怒鳴ったり、イライラする短気な人。
- ③ 仕事人間で、無趣味な人。
- ④ 協調性がなく、人の輪に入れない孤独な人。
- ⑤ 人を信じられず、モノにしかなれない人。



以上の五項目だった。

自分の性格を客観視しながら一項目ごとにそれを重ねてみた。

- ①は私の性格とは全く違う。②は「すぐ」という言葉を消せば、ある程度重なる。③は自分では違うと思う。④は判定が難しい。協調性は人に負けない程あるのだが、孤独に身を置くのも好きだから。⑤は私とは無縁の性格で全く重ならない。

総じて判定すれば80%くらいは私の性格とは無縁だ。従って確率から考えれば私はボケない部類なのだ。

しかし、この五項目は「性格」から見た「ボケやすい人」である。ボケにくいと自ら判定しても、最近では人名、地名を直ぐには思い出せないようになってきた。このまま物忘れが進めば、やがて自分の名前すら思い出せないかも――。

「思いのままに」我が心の雑記帳」(鈴木澄夫著)より

青空に向かって大きくノビをし、曲がった腰を伸ばした。ヤカンの注ぎ口にかぶせたアルマイトのコップを取り上げて、麦茶を注ぐとゴクゴクと飲みほした。一杯では足りなくて、もう一杯飲んだ。

「爺さんの調子はどうだ？」

友子の隣に腰を下した。

「死んだまま」

ぶっきらぼうな答えだ。おかつば頭の顔はまだ小学生のように幼いが、本当は中学生……、でも学校に通っていればの話だ。

「そうか」

汗ばんで火照った体に、高原の風が心地よい。水を張った田んぼに、整然と苗が並んでいる。

「あの男の体には、悲しい血が流れる……」

友子が言った。

「同じ所に居たら血が凍ってしまふんじや。だから旅を続けるしかない」

友子が顔を顰めた。それが笑顔であることに、最近ようやく気付いた。「爺ちゃんは顔はぶさいくですけど、言うことは二枚目じや」

頷いた。まさか下戸だとは思わなかった。酒米を作っている人間が、酒が飲めないとは言えなかったのだ

ろう。禁酒中だとかまかしていたが、少しくらいはいいだろうと湯呑の酒を半分飲んで、真っ赤に顔を腫らして寝込んでしまった。

「オカダは、もう行くんか？」

友子が尋ねた。違和感を覚える。

新しい名前に馴染む頃には、もうその場所を離れている。

「いや、もう少し居る」

無農薬の酒米は手間がかかる。苗

護岸工事の飯場暮らしが三カ月続いた後だった。ほんの気まぐれで、

ろう。今のおれは、地べたを這いずる虫けらだ。

八反錦の里を訪ねたのだが、ちょうど田植時で、人手を探していた農家を手伝うことになった。

「悲しい血はおなごに暖めてもらえない」

驚いて友子の顔を見た。

「爺ちゃんが言うと思ったが、うちのストーブじや、ダメなんか？」

丸まったダンゴムシを手のひらに乗せて転がした。色が薄くて小柄なので、コシビロダンゴムシだろうか。

都会でもよく見かけるダンゴムシはオカダンゴムシで、外国からの帰化動物、コシビロダンゴムシが日本の固有種だと、昆虫博士が教えてくれた。

「エビヤカニと同じ甲殻類で、食べられるそうや」

フライパンでダンゴムシを炒って

みた。ポップコーンのように殻がは

じけたのが食べごろ……、土臭くて

味がしない。食べられるが、食べ物

ではなかった。乾燥させたダンゴム

シは鼠婦（そふ）という漢方薬にな

る。

手のひらを口にやって、ダンゴム

シをパクリ、友子が目を見開いた。

「オカダは顔はいいけど、馬鹿だな」

本当は、口に入れる寸前にダンゴ

ムシを転がして地面に落としてい

る。田んぼの草取りを続けるために

立ちあがった。

（うん？ あの蝶は……）

ふわふわと優雅に飛翔する姿が目

に入った。アサギマダラ、浅葱色（青

く暖まる。

確かに、あの家の薪ストーブはよ

ダンゴムシを摘み上げた。ダンゴ

ムシが大好きな同級生がいた。みん

なから昆虫博士と呼ばれていた。ダ

ンゴムシ、ハサミムシ、オケラ、ゲ

ジゲジ……、変わった虫が好きだっ

た。おれは、優雅な蝶に憧れた。自

分とは正反対なものに惹かれるのだ

※県北の歴史や風物を題材としたファンタジー小説です。

「浅葱斑」

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 25



緑色の古称)に斑の模様がある大型の蝶だ。農薬を散布していないので、この山里には多種多様な蝶が生息しているが、アサギマダラを見るのは初めてだった。

誘われるように、蝶の後を追いかけた。幼虫のときにガガイモ科の植物を食べて育つので、毒性の強いアルカロイドを体内に取り込んで、体を毒化することで敵から身を守っている。幼虫、蛹、成虫と鮮やかな色をしているのは、毒を持っていることを知らせる警戒色だと言われている。だから、悠然と飛翔している。

水路の脇に生えている黄色い花にとまった。メタカラコウ(雌宝香)、フキに似た葉から、長い花径が伸びている。

(雌か)

翅(はね)を閉じたときに、後翅に雄の性票である斑紋がなかった。花の蜜を吸い始めるのを待って、そっと手を伸ばして捕獲した。やはり、翅にマーキングされている。

アサギマダラは、旅する蝶として有名だ。和歌山でマーキングされた蝶が、香港で捕獲されたこともある。初夏から夏にかけて北上して、秋には逆に南下する。

アサギマダラのマーキング調査が開始されたのは、まだ一九八〇年代に入ってからのことだ。捕獲した場所、年月日、捕獲者がわかるように、マジックペンで記入する。おれも調査に協力した。北海道から再捕獲の連絡があったときは、本当に嬉しかった。おれのアサギマダラが、沖縄から列島を縦断して北海道までたどり着いたのだ。

(まさか……)

捕獲者のマークを見た時に、思考が停止した。

(どうして……)

困惑の中に希望が灯った。

「オカダー！」

振り返ると友子が立っている。時間が動き出した。翅をつかんだ指を空に掲げて、そっと指を離した。渡りの途中だろうか。元気でなど、しばらく優雅な飛翔を見守っていた。「電話を借りるぞ」

走り出した。畦道を駆け抜けて、玄関の土間に飛び込んだ。靴箱の上に置かれた黒電話の受話器を取り上げる。番号を暗唱しながら、ダイヤルした。呼び出し音が鳴るたびに、気弱になる。

あきらめかけたときに、やさしい声が聞こえた。夢の中で何度も聞いた懐かしい声だ。しかし、返事ができない。

「あんた……、あんたなんですよ？」

だめだ、しゃべる言葉がない……。受話器を置こうとした手をつかまれた。爺さんがおれの顔を睨んで、小さくかぶりを振った。

(顔はぶさいくなのに、やることは二枚目だ)

「おれだ……」

なけなしの勇気を絞り出した。

※写真は左木山祝一氏撮影。氏が運営しているネットブログ「そよ風のなかで」からの転載です。

まつの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
 - ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日
- 営業時間：9:30~19:00
- TEL: 090(9913)3052

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から)※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1回 2,000円 半年間 9,000円 1年間 1,5000円 >



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「日本の宗教」

田中英道 著 育鵬社

この本を読む前は、日本人に宗教は不向きなのだと思っていた。そんな日本人の、東日本大震災の時の姿が世界を驚嘆させた。暴動や略奪が起きることなく、悲嘆にくれながらも災害を淡々と受け入れている……。

ユダヤ教に起因するキリスト教とイスラム教は、天地創造の絶対神が存在する。日本ではまず自然ありき、神も自然の摂理に従っている。



八百万の神々は、自然の法則を神格化したものだ。仏さまもイエスさまも、ほんわかと受け入れた。初詣で神社に参拝し、お盆には墓参り、クリスマスにはケーキを食べる。軽薄だと考えていたが、自然崇拜の DNA が現代の日本人にも受け継がれているのかもしれない。

「雪の鉄樹」

遠田潤子 著 光文社

やるせない物語だ。不幸な人たちがばかりが登場してくる。庭師の雅雪は、贖罪を理由に被害者宅に通っている。両親を喪った遼平が赤子の頃から、懸命に世話をしている。遼平の祖母から屈辱的な仕打ちをされながらも、雅雪はどうして自分の罪でもない事件の償いを続けるのか――。

何度も途中で読むのをやめようと思った。頭を下げて、ただひたすら詫言することしかしない雅雪に苛立ち、報われない善意に憤慨した。そして……、最後まで読んで本当によかったと今では思っている。「本の雑誌」が選ぶ 2016 年文庫ベストテンで第 1 位を獲得した意欲作。超重量級、ですよ。



「無能の人」

つげ義春 著 日本文芸社

精神を病んでいた時期もあって、寡作の漫画家である。巻末のインタビューを読むと、漫画家に見切りをつけて商売することを考えていたようで、石屋や鳥屋、中古カメラ屋、古本屋などの願望が短編となって収録されている。

隠遁目的の商売だから、何をやっても主人公は失敗する。妻子を養うことのできない「無能の人」なのである。悲惨な生活苦の物語なのだが、こんなに心が安らぐのはなぜだろう。枯れた諦観は西行法師の境涯か。最後の「蒸発」では、漂泊の俳人、井月が登場する。手塚治虫が漫画界の太陽なら、つげ義春は月下の巨人。「無能の人」は竹中直人監督&主演で映画化されている。



どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば 3 割で買戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

どろろくろ俳壇

七変化客を招きて妻の部屋

近藤 昌平

栗の花落ちれば梅雨が来るといふ

原博己

夜明より初音を暫し確かめる

片岡 正人

採り遅れ少し傷んだ苺かな

隆愚

合歡の花わかれがたしや朝の月

赤川 冬人

投稿&寄稿

「ワンダースリー」 M・A

資源ゴミが世界各地で溢れている。最大の受け入れ先だった中国が、今年から海外ゴミの輸入を禁止した。市場を無視した一方的な通告には反感を覚えるが、理由が環境の悪化ということでは、文句が言えない。テレビのニュース番組で、プラスチックを分別する中国の寒村の光景が放映された。汚れたままでは資源

にならないので、大量の化学洗剤を使って手作業で洗浄、その廃液はそのまま河川に流される。「自分の出したクソは自分で処理すべし」と心の中でつぶやいていた。子どもの頃、観ていたアニメに、W3（ワンダースリー）がある。鉄腕アトムやジャングル大帝の手塚治虫の虫プロが制作、まだモノクロだった時代だ。近未来のSFアニメで、戦争ばかりしている地球の現状を危惧した銀河連盟が、ワンダースリーと呼ばれる銀河パトロール要員

※投句を歓迎します。

の三人を地球に派遣する。一年間調査を行い、改善の余地なしと判断されれば反陽子爆弾で地球は破滅させられる……。なんだか現代でも通用しそうなテーマである。

パトロール隊は、地球の動物の姿を借りて潜伏する。隊長のボッコはウサギ、隊員のブッコはカモ、同じく隊員のノッコはウマ、それぞれ特殊能力を持っている。いちばん好きだった、というか憧れたのがウマのノッコの造形能力。手近にあるものを材料にして、未来の機械をこしらえてしまう。

パトロール隊員の乗り物のデザインが斬新だった。大きなタイヤのホイール部分が乗者スペースで、両サイドから透明なドームがせり出している。その夢の未来カーを、ノッコはゴミのガラクタから作ってしまうのだ。

今の地球で本当に求められている夢の技術は、廃棄物からものを作る技術、リサイクル技術なのだと思う。現在のように細かく分別しなくても、機械を通しただけで原材料を細分化して取り出す技術。それが徹底されれば、資源不足は解決されるし、今のように人工物で自然を汚染することも少なくなる。土壌や海水から、

マイクロプラスチックのような人工物を除去することもできるだろう。エネルギー問題も改善できる。そうになると、地球温暖化も……。

宇宙への進出、人工知能、アンドロイド&ロボット、ゲノム解析による不老不死への挑戦等々、人間の欲望は際限がない。だけどその前に、自分のクソぐらいなんとかしないと、銀河連盟に愛想を尽かされて反陽子爆弾でドカン！人間のノッコが登場すれば、ノーベル賞は間違いない、でしょ？



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

一 硬式テニス参加者募集 一

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)

場所：三次運動公園の屋内&屋外コート

・火曜日 (9:30 ~ 12:00)

・水曜日 (9:30 ~ 12:00)

・土曜日 (10:00 ~ 12:00)

連絡先：中川 (☎080-5610-2376)



洲澤陶芸教室 (電動ロクロほか成形全般)

・県大前教室 (0824-72-0686) 月謝 2,000 円

金曜日 (毎週) 午後 1 時~4 時 30 分

・敷信自治センター教室 (0824-72-0571) 月謝 1,000 円

木曜日 (第二、第四) 午後 1 時~4 時 30 分

・庄原小学校前教室 (0824-72-1074) 月謝 1,000 円 (月2回)

月曜日~水曜日 (希望する日) 午後 1 時~4 時 30 分

※詳しくはお電話ください。0824-72-1074 (夜間を希望)

洲澤悦二 (庄原市西本町 2-11-19)

陶芸 教室

《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
- 教室&講座案内
- イベント情報
- あなたの大切な本の紹介
- ボランティア・ライター(現地記者)募集!

※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

一 絵本の無料レンタル 一

イベントや集会の時などにお使いく
ださい。

「箱貸し」します。

図書館の除籍本や販売には難のある
本ばかりなので、破損しても大丈夫
です。

ご希望の方はどら書房まで。

やまびこ朝市販売所

比和産の新鮮野菜・加工品を直売しています。

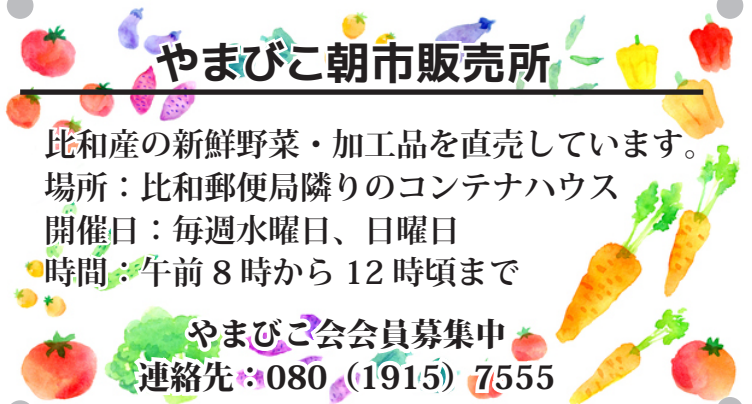
場所：比和郵便局隣のコンテナハウス

開催日：毎週水曜日、日曜日

時間：午前 8 時から 12 時頃まで

やまびこ会会員募集中

連絡先：080 (1915) 7555



発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090 (9913)3052 (赤川)
e-mail: touzin@sannet.ne.jp
年間購読料：2,000円(郵送料込)

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

編集後記

◇5月号の「虫と草木
と人びと」で、ノビ
ルの方言名が間違っ
ていました。「はいとう
にんにく」ではなく「ほ
いとうにんにく」。校
正ミスで、先行配布し
たものには誤記載され
ています。申し訳ありませ
んでした。

◇同じく「虫と草木と人びと
」で、ゴギの漁法は「よぼり」
ではなく「よぎり」ではない
かとの指摘を受けました。鋸
の歯で抑え込むので「夜切
り」。夜の川で捕るので「よ
かわ」と呼んでいる地域もあ
るようです。こういう反響が
あるのは嬉しいですね。

◇五月に入っても寒暖差が激
しい日が続いています。鼻水
が止まらないのは……、たぶ
ん猫の毛アレルギーです。

九日市だより

出店者の紹介をさせていただきます。 買物&散策の参考にして下さい。
※最終頁の出店地図に掲載していない店は、 今月はお休みです。

- ◆すけあくろう：コーヒー、親鶏の塩焼き。自宅は音楽スナック（庄原市一木町）
- ◆昭助：焼きそば、旬の野菜など（庄原市市町）
- ◆とらぢ：キムチ、自宅は韓国料理（庄原市高町）
- ◆二八そば加工所：そばカレントウ、餅など（庄原市比和町）
- ◆アーミッシュ：シフォンケーキ、椎茸など（庄原市口和町）
- ◆佐藤食販：にぎりちくわ、野菜天など（福山市草戸町）
- ◆さだっさ：旬の野菜、実留永山の醤油など（庄原市宮内町）
- ◆健康企画グループ：東城の豆腐、寿司など（三次市甲奴町）
- ◆椰家(ナギンチ)：押し花アート、野菜など（庄原市三日市町）
- ◆ハートワークカンパニー：染物、アフリカ民芸布など（庄原市比和町）
- ◆郷屋：木工品、まな板、盆など（尾道市因島土生町）
- ◆工房アム：創作額縁、アクリル絵など（広島市南区）
- ◆ちくちくハウス玉手箱：布手芸品（庄原市川西町）
- ◆かぐや姫：布手芸品（広島市安佐北区） ◆なかや：古布の小物など（広島市）
- ◆くまさん：衣類、雑貨など（三次市畠敷町）
- ◆やまのおみやげや：木工品、かずら細工など（庄原市宮内町）
- ◆ROOM OF KEIKO：トンボ玉、アクセサリーなど（庄原市口和町）
- ◆めだかの学校：手芸品、野菜など（三次市吉舎町）
- ◆さとちゃんち：ハンドメイドグラニーバッグ、チューリップハット（安芸高田市甲田町）
- ◆ママンドール：手作りドール、雑貨など（三次市畠敷町）
- ◆花一：盆栽、山野草（岡山市北区） ◆農楽会：野菜、（庄原市七塚町）
- ◆タツミ矢：衣類（福山市駅家町）
- ◆アパレルゴトウ：日田焼き杉下駄（福山市新市町）
- ◆まなべ商事：タオル、肌着、靴下など（愛媛県今治市）
- ◆克国水産：魚干物（福山市鞆町）
- ◆吉備路花田FF：旬の果物、山野草（岡山県総社市）
- ◆山本水産：魚干物など（島根県浜田市）
- ◆庄の助栄泉：自然薯入り蒸し饅頭（庄原市板橋町）
- ◆くんえん工房香豚：豚燻製など（世羅郡世羅町）
- ◆ハナビラタケ広島販売：ハナビラタケ、麩、油揚げなど（庄原市実留町）
- ◆開盛社：姓名判断、印鑑、表札など（呉市）
- ◆ぬくもり：ジャム、野菜など（庄原市中本町）
- ◆宮川屋：餅、麩、ぜんざい、など（庄原市口和町）
- ◆田崎屋：骨董、雑貨（広島市南区） ◆佐藤園芸：花、鉢物（岡山県早島町）
- ◆砂田海産：海産物、魚干物、（尾道市） ◆スプレモ：コーヒー（三次市十日市町）
- ◆お福：着物、古布、小物など（広島市東区）
- ◆どんぐりーず：焼き芋（庄原市東本町） ◆ラブ・ベイビー：小物、古着など（三次市畠敷町）
- ◆八銚自治新興区玉ねぎ染め：玉ねぎ染め（スカーフ）、野菜（庄原市西城町）

・ 「しょうばら九日市」 ホームページ出店者紹介コーナーもご覧下さい。
・ 出店希望の方は、 楽笑座内事務局へご連絡下さい。（0824-72-8285）

第 209 回

「庄原九日市」

平成30年

6月9日 (土) 9:00~13:00

庄原九日市とは？

天正年間（440年前）に物々交換で始まった市（いち）。
昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し2001年に復活。

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」

➡第10回 里呼織工房展
とき 6月8日(金)~10日(日) 10時~16時

★風龍

➡九日市スペシャル！餃子200円！

★どら書房

➡月曜日と火曜日はお休み

★楽笑座で「まかない食堂」「うた声喫茶」開催中。

★九日市コンサート（吉岡中央堂店頭にて）
11:00~

出店配置図



1 お休み

2 お休み

3 昭助
たらち
二八そば加工所
アーミッシュ
さだっさ
佐藤食販
健康企画グループ

4 郷屋

5 ちくちくはうす玉手箱
工房アム
かぐや姫

6 ROOM OF KEIKO
めだかの学校
やまのおみやげや
さとちゃんち

7 農楽会

8 タツミ矢
アパレルゴトウ

9 まなべ商事

10 吉岡中央堂

11 お休み

12 お休み

13 山本水産
くんえん工房 香豚
ハナピラタケ広島
花田FF

14 開盛社
めくもり

15 宮川屋
田崎屋
砂田海産
佐藤園芸
珈琲屋スプレモ

16 お福

出店申込みは、【毎月20日締切】コンパネ1枚スペース1,000円～ 九日市愛好会事務局
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 楽笑座内 TEL/0824-72-8285

ホームページ
<http://www.kunchi-ichi.jp>

